

最優秀

おばあちゃんとの料理

新見市立野馳小学校

五年 森 咲羽

私は小食だ。しかしおばあちゃんの料理はとてもおいしいからご飯が進む。

おばあちゃんは長年料理をする仕事をしてきたから食材を切るのも、焼くのも、味付けも全部上手だ。私はそんなおばあちゃんの料理をする姿が大好きだ。なぜなら、おばあちゃんが料理をする時の仕草や笑顔を見ていると、とても楽しそうにしているからだ。おばあちゃん自身も料理をするのが好きだと言っていた。なぜ好きなのかを聞くと、「食べた人の喜ぶ顔を思い浮かべるとうれしくなるのよ。」と、教えてくれた。大変なはずのご飯の準備も楽しそうにしているおばあちゃんを見ていると、とてもそんけいする。また同時に、料理にはどんなみ力があるのだろうと料理そのものに興味がわいてきた。

夏休みが始まった頃、お母さんが体調不良で寝込んでしまった。お母さんが元気になるまでの一週間、おばあちゃんのお手伝いとして朝と夜のご飯を、毎日一緒に作ってみた。朝ご飯は、パンとサラダの準備と盛り付け。晩ご飯は、カレーライスやタコライス、スパゲッティも作った。作

り方もメモをして全部覚えた。教えてくれたのはもちろんおばあちゃんだった。しんどくて何日も何も食べられなかったお母さんが私の作った料理は、

「おいしい、おいしい。」

と食べてくれたのが嬉しかった。でも、料理をするのほとても大変だということも知った。

例えば、かたい物を切る時は包丁を持つ手がとても痛かった。また、火の調節が難しくガスからはなれることができなかった。そして一番大変だと感じたのは、料理の味付けだ。みんなの健康を考えながら味もおいしくする分量を見つけてのが大変だった。こんな大変な思いをして作った料理を食べてもらえなかつたり残されてしまったりすると悲しい気持ちになることも知った。

いつも料理をしてくれるお母さんやおばあちゃんは、こんなに大変なことを毎日がんばっているのだと思うと、ご飯は残さず食べることに、

「おいしかったよ。」

と言うことを忘れないようにしようと思った。

私は家族のみんなに喜んでもらうのが好きだ。この夏、私は料理という、家族のために一生懸命になれるものを見つけてきた。料理をするきつけかけをくれたおばあちゃんは、私のそんな敬する師匠でもある。これからもみんなに、

「おいしい。また作ってね。」

と喜んでもらえる様なご飯を作りたい。また大好きなおばあちゃんには、これからも元気で料理をし続けてほしいし、私にもつとたくさんの料理を教えてほしいと思う。

「おばあちゃん。これからもよろしくね。」